



柏市未来につなぐ 魅力ある学校づくり 基本方針

概要版

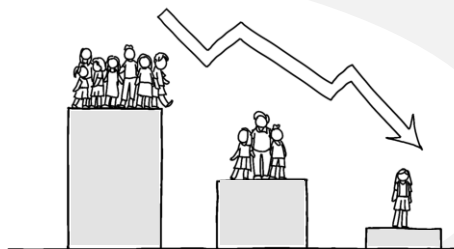
令和7年3月
柏市教育委員会



柏市の学校の「いま」

児童生徒数の減少

- ・ 令和6(2024)年度は3万2,419人と、ピーク時から40年で約36.4%減少しています。
- ・ 地域や学校による差はありますが、全体として小・中学校ともに、クラス替えができない比較的規模の小さな学校が増加する見込みです。



施設の老朽化 新しい時代の学びへの対応

- ・ 築30年以上経過した建物が8割以上を占め、施設の老朽化が顕著に進んでいます。
- ・ 児童生徒一人一人に合わせた学びや対話的な学びなど、多様な学びのスタイルへの対応も必要です。



ウェルビーイング 多様化の時代

- ・ 子どもたちのウェルビーイングを実現し、誰一人取り残さない学校教育を実現する必要があります。



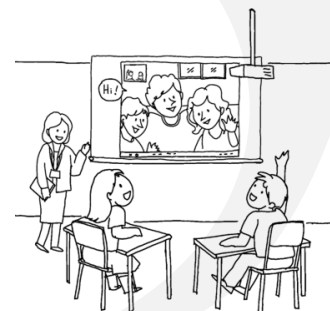
教職員の多忙化, 働き方改革への対応

- ・ 時間外勤務の見直しや教員の年齢層の偏りなどが課題となっており、教職員が担う業務の明確化・適正化が求められています。



急速なグローバル化, DX化の推進

- ・ グローバル化が進む現代社会において、地域や世界で活躍する人材を育成するグローバル型教育が求められています。



そんな柏市が目指す「これからの学校教育」とは・・・



柏市の学校教育が目指す子ども像

自他の対話を大切にしながら、学び続けるかしわっ子
～よりよい自分 よりよい“かしわ”を目指して～

「自他の対話を大切にしながら」という言葉には、他者との対話や関わりはもちろんのこと、自分自身との対話を大切にすることで、自分を大切にし、自己肯定感を高めて欲しいという願いを込めました。



また、「よりよい“かしわ”」という言葉には、柏だけではなく、地域や社会を含めた大きな意味合いを込めています。創造的で居心地のよい社会の形成に向けて主体的に参画できるよう、子どもたちには、地域との関わりを通じて成長してほしい、との願いから、子どもたちにとって身近な社会である“かしわ”という言葉を入れました。

本市の学校教育が目指す子ども像には、予測困難な時代の中で、自他を尊重し、多様な人々との関わり合いを通じてなりたい自分を模索し、個々のそれぞれの想いや、よりよい柏、よりよい社会の実現を目指して学び続ける子どもになって欲しい、そんな願いが込められています。



1 誰一人取り残さない学校教育の推進

(1) 学びをつなぐ

① 小中一貫教育の推進



現状と課題

「小1プロブレム」「小中ギャップ」と称されるように、入学したばかりの児童生徒が環境変化や学習内容の変化に馴染めず、毎日の登校が困難になったり、人間関係をうまくつくれなかったりすることなどが課題となっています。

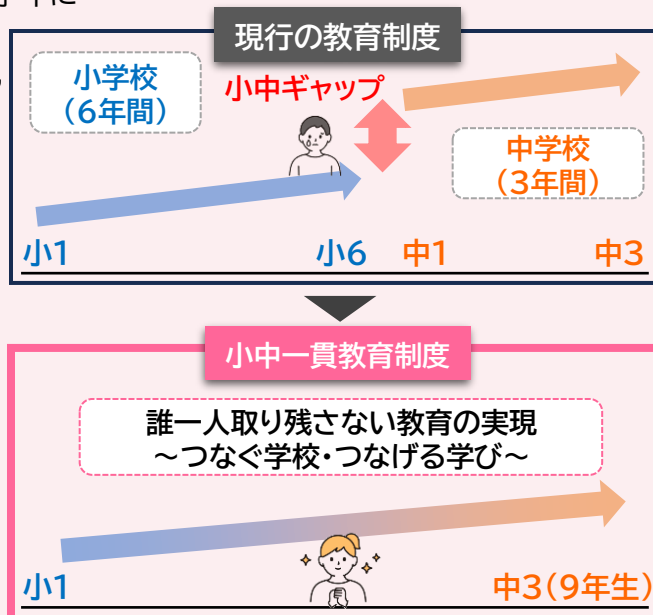
<対応の方向性>

1 市内全校で小中一貫教育を推進 義務教育9年間を通して系統性、連続性のある教育活動を実施

- ✓ 全市的な小中一貫教育の推進により、小・中学校が目指す子ども像を共有し、9年間を見通した教育を実践することで、義務教育9年間の学びを一貫性・系統性のあるものとし、小学校と中学校の教員によるきめ細やかな指導、切れ目のない支援を行うことで、子どもの戸惑いを軽減し、学習や学校生活への適応を高めます。

2 小1プロブレムや小中ギャップ、心身発達の早期化に対応

- ✓ 異なる校種(幼稚園・保育園・こども園/小学校/中学校)についての理解を深め、小・中学校間のつながりを強化することは、0歳から15歳までの学びの連続性に配慮することができ、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくることが期待できます。
また、小学生と中学生の異学年交流により、「自己存在感」や「自己有用感」を高めるなど、集団生活に必要な能力の体得や人格形成上、有益な関わりが期待できます。
さらに、幼児期の学び方を小学校低学年に応用することで、小学校との滑らかな接続を実現させるとともに、高等学校間でも連携を図り、学びの連続性を充実させていきます。



② グローカルな人材の育成



現状と課題

グローバル化が進む現代社会において、地域でグローバルな視点を持ってコミュニティを支えたり、世界から地域を活性化させる活動をしたりするグローバルリーダーが求められており、そのような人材を育成する、「グローバル型教育」の推進が必要とされています。

<対応の方向性>

1 英語教育・国際理解教育の推進

- ✓ 英語教育を充実させることに加えて、外国にルーツを持つ児童生徒との交流や国際交流会等を通じて国際理解を深めることで、英語力を向上させるとともに、英語を使ってやり取りする楽しさを感じ、コミュニケーションの手段として積極的に英語を活用する態度の育成を図ります。

また、グローバルな視点を持ち国際社会で活躍するために、まず自国の文化や価値観を深く理解することを大切にし、日本人としての誇りを持ちながら世界とつながる人材の育成を図ります。

2 英語力の向上を図るための環境整備

- ✓ ALT、外国語支援員の配置を充実させることや、教職員の授業改善による児童生徒の英語力の向上を図ります。英語検定等の資格取得促進に向けて、子どもたちが英語を学ぶ環境を整備します。

3 地域と連携した地域学習・持続可能な開発のための教育(ESD)の推進

- ✓ 学校運営協議会や地域ボランティア、地域の企業等と連携した地域学習を推進することで、郷土愛を醸成し、将来、柏で活躍する人材の育成を目指します。
- また、持続可能な社会の実現を目指して、次世代につなぐ教育の推進を図ります。



(2) 子ども主体の学び

① 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実



これからの社会を生きる子どもたちは、今後ますます激しくなる社会の変化を前向きに受け止め、自らが主体となって様々な困難を乗り越えていくことができる資質・能力が必要になります。

<対応の方向性>

1 学び続ける力(アウトプット, 主体性, 多様性を重視した学び)を日常の授業で育成

- ✓ ICTを活用しながら、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業・カリキュラム改善を推進します。

2 認知能力(基礎的な知識・技能), 非認知能力(協調性や忍耐力などの社会情緒的スキル)の育成

- ✓ 思考力・判断力, 表現力などの認知能力だけでなく、「4つのC」を中心とした非認知能力の育成に重点をおき、子どもたちが社会で生きていく力を育みます。

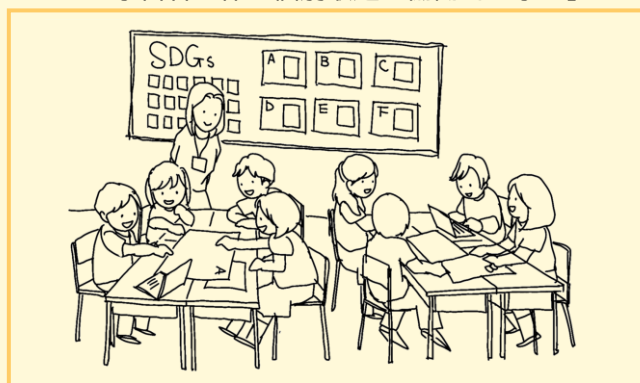
子どもが主役，自分で学ぶ，
学び合う姿



「教師主導の一斉講義型授業」



「学習者主体の個別最適・協働的な学び」



② 特別支援教育の推進



全国的に特別支援学級に在籍する児童生徒数は増加傾向にあり、本市においても平成28(2016)年度の627人から令和6(2024)年度は1,286人と大幅に増加しています。一人一人のニーズに応じた支援・指導に対応する必要があります。

<対応の方向性>

1 「誰一人取り残さない」教育の充実

- ✓ 個別の教育的ニーズのある児童生徒に対して、自立と社会参加に向けて、福祉・医療との連携・協力を図りながら、通常の学級、通級指導教室、特別支援学級、特別支援学校といった連続性のある多様な学びの場での教育を充実させます。

2 インクルーシブ教育システムの構築

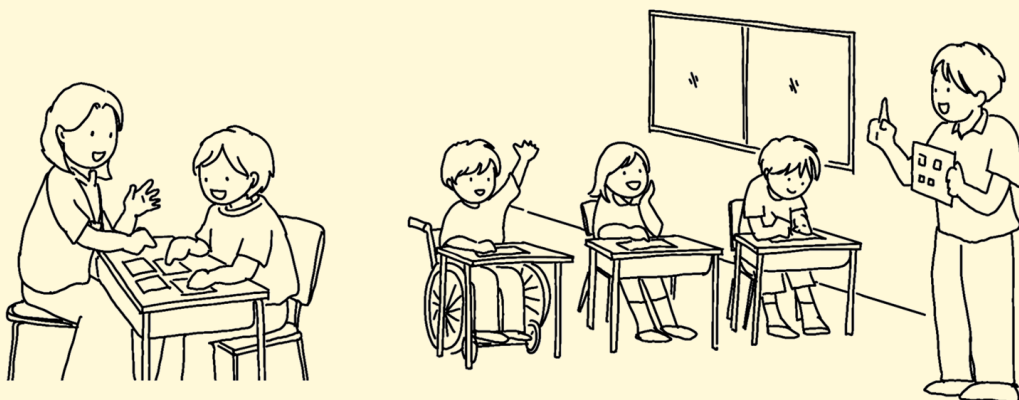
- ✓ 障害のある人も積極的に社会参加・貢献できる社会を作るため、障害の有無に関わらず、子どもたちが共に学ぶことを推進するインクルーシブ教育システムの構築を図ります。

3 教員の専門性及び指導力の向上

- ✓ 特別支援学級の担任だけでなく、管理職や全教職員の専門性や指導力の向上を推進します。

4 一人一人のニーズに応じた就学先の決定

- ✓ 専門の相談員が保護者と一緒に適切な教育方法、教育の場などについて考え、一人一人のニーズに応じた就学先を決定します。



(3) 安全・安心な居場所づくり

① 不登校児童生徒への支援



不登校を理由とした長期欠席者数は全国的に増加傾向にあり、本市においても増加しています。

<対応の方向性>

① 教育相談体制を整え、不登校児童生徒に対応できる環境を整備し、学びの選択肢(居場所)の確保

- ✓ 令和5(2023)年度に田中北小学校内に増設した「教育支援センター柏たなか」を含め、市内5か所にある教育支援センターについては、居場所の提供、学習支援等の相談対応及び支援等のさらなる充実を図っていきます。

② 子どもたちが安心して自発的に 行きたくなるような学校づくりの推進

- ✓ 授業の改善や、いじめ等の問題行動に対して毅然とした対応を徹底するなど「みんなが安心して学べる学校」を創生していくこと、また、社会的自立につながるよう、地域や関係機関とも連携しながら適切な支援や働き掛けを行います。
- ✓ 幼保こ小、小中一貫教育の推進を含め連携を強化します。



② 教育相談の充実

- ① 学校間、関係機関、保護者、地域との連携体制の強化
- ② 生徒指導と教育相談の両輪による、学校の諸課題における未然防止や早期発見・早期解決
- ③ いじめ発生時の適切な対応



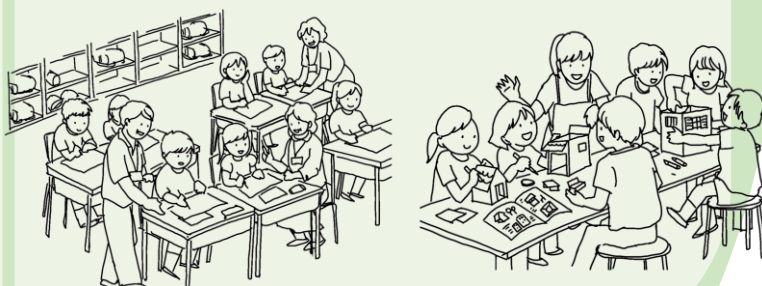
対面相談



オンライン授業

③ 子どもの居場所

- ① 放課後子ども教室【居場所型】とこどもルームの一体型運営の整備
- ② 放課後子ども教室【補充学習型／体験型】や夏休み子ども教室の継続



(4) 家庭・地域とともに

① コミュニティ・ スクールの活性化

- 1 「地域の支援」から
「地域との連携・協働」へ
- 2 個別の活動の総合化・
ネットワーク化
- 3 地域と学校のコーディネート
機能の充実
- 4 社会に開かれた教育課程,
地域とともにある学校の実現



② 市立柏高等学校 の魅力化

- 1 学習環境の充実
- 2 キャリア教育の推進
- 3 地域と歩み続ける部活動
- 4 積極的なイチカシの魅力発信
(県立学校との差別化)



ソーシャルチェンジ



(5) 生き生きと働き学び続ける教職員

① 子どもと向き合う 時間の確保

- 1 教職員が担う業務の明確化
- 2 働きがいのある職場環境
づくり
- 3 子どもと向き合う時間を
確保



② 教職員研修の充実

- 1 体系的・計画的に学びを
進められる研修体系の構築
- 2 教育課題を解決するために
職層に応じて必要な
マネジメント力の育成
- 3 主体的に学び続ける教職員
の育成
- 4 教職員のニーズ、
教育課題に
基づいた研修
の実施



2 学びを支えるよりよい教育環境づくり

(1) 学びを支える教育環境

① 将来を見据えた学校のあり方



現状と課題

本市の児童生徒数は、昭和59(1983)年度の5万970人をピークに、ピーク時から40年で約36.4%減少しています。地域や学校による差はありますが、全体として小・中学校ともに、クラス替えができない学校等の比較的規模の小さな学校が増加する見込みです。

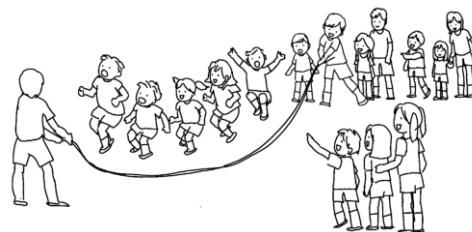
<対応の方向性>

1 小学校、中学校、義務教育学校について、望ましい学校規模、学校配置及び通学距離に関する基準の設定

✓ 将来にわたる児童生徒数の減少を踏まえ、「子どもの教育環境が最優先」の視点に立ち、本市としての望ましい学校規模及び望ましい通学距離に関する基準を定めます。

2 一定の集団規模を確保する学校づくりの推進

- ア 学校生活を通じて子どもたちが社会で生き抜く力を身に付けることができるよう、一定の集団規模を確保したよりよい学校づくりを推進
- イ 単学級校については、義務教育学校の設置を含めた学校の統合等により解消を図る。
- ウ 義務教育9年間をトータルに捉え、中学校区を基本とした学校づくりを進める。
- エ 施設の老朽化状況を踏まえた学校づくりを推進



低学年と高学年が一緒に活動

3 通学路の安全対策の充実・強化

<望ましい学校規模>

小学校	1学年あたり3学級～4学級 (学校全体では18学級～24学級)
中学校	1学年あたり4学級～6学級 (学校全体では12学級～18学級)
義務教育学校	前期:1学年あたり3学級～4学級 後期:1学年あたり4学級～6学級 (学校全体では30学級～42学級)

<望ましい通学距離・通学時間>

小学校にとっての
望ましい通学距離：2 km以内
中学校にとっての
望ましい通学距離：6 km以内



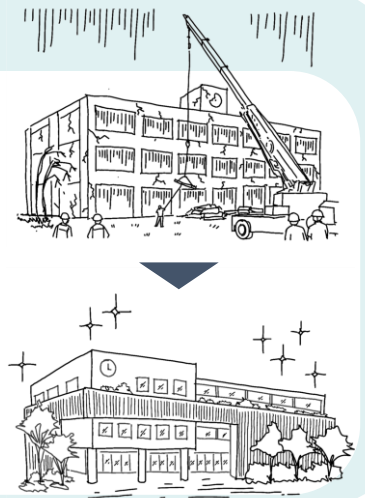
② 新しい時代の学びを実現する学校施設の整備

- 1 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた新しい学びを可能にする施設整備の推進
- 2 健やかな学習環境を提供するため、空調設備の設置等、快適な生活空間を確保
- 3 環境に配慮した施設及び災害に強い施設整備の推進
- 4 地域と連携・協働する空間や他の公共施設等との共用化・複合化の検討



③ 安全・安心な学校施設の充実

- 1 近年の建設に係る現状(建設コスト増や人員不足等)を踏まえた計画の見直し
- 2 対応の優先度を考慮した改修又は建替の実施
- 3 増加する児童生徒の需要に対応するため教室不足対策を実施



④ 心身の健康を支える給食の提供

- 1 学校給食施設の衛生管理の充実強化
- 2 学校給食センターの機能強化
- 3 生きる力と豊かな人間性を育む食育の推進





推進に向けて

本市教育委員会では、本方針に基づき、これまで以上に学校現場と協力・連携を密に図りながら取り組んでまいります。子どもたちの健やかな学びを育むためには、保護者をはじめとした市民の皆様の理解が不可欠です。より多くの市民の皆様に本方針をご覧いただき、本方針の実現にご協力いただきたいと思います。

知ってもらう

- ① 児童生徒
- ② 保護者
- ③ 教職員
- ④ 地域の方々



学校教育について 具体化

教育振興計画を
令和7年度に改訂

→ 誰一人取り残さない
学校教育の実現へ



学校施設について 具体化

学校施設個別施設計画
を令和7年度に改訂

→ 将来を見据えた学校
施設の実現へ

